

Fate/stay night 【仮物の正義】

二刀流に憧れた中二病

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

七人の魔術師たちが己が願いを叶えるべく、7騎のサーヴァントと共に死闘を繰り広げる戦争の事を聖杯戦争、という。

その七人の内の一人、衛宮士郎は本来の正史とは別の道を辿る。

これは、【正義の味方】である筈だった少年が、【正義】を捨てる物語である。

目次

第一話	衛宮士郎という男	1
第二話	再来の猛犬	6

## 第一話 衛宮士郎という男

「ん？衛宮？あいつは…… そうだな、困ってる人がいたら誰でも助けるな。それが悪意を持ったものでもな。」

衛宮士郎——彼の事を周囲の人間に聞くときつとこう答える。

——【馬鹿をつけた方がいいお人好し】

彼は学校にいる間、それ以外でも構わず助けを求められる、困っているなら必ず手を差し伸べる。そう、このように。

「衛宮あ、僕の代わりにさ、道場の雑巾がけしといてくれよ。僕今日用事あるんだよ。」

そんなただ面倒臭いだけというのが嫌ほど伝わってくる、更に悪意のある表情をしている。

それでも、彼はほんの一瞬、気付かれない程度に曇った表情をした後

「ああ、いいよ。やつとくよ。」

ほんの少し笑みを浮かべながら、さも喜んで引き受けると言っているようにそう言った。

しかし、当の頼み事をした彼、間桐慎二はその笑みが気に入らなかつたのか、不機嫌な顔になり、イライラとした態度を見せながら「…… あつそ。じゃあ、頼んだよ。」

そう言い残して一緒にいた女子生徒と共に早歩きで去っていった。そんな彼の後ろ姿を見ていた衛宮士郎は、こう思っていた。

（あいつは…… 慎二は多分怒ってるんだろうな。肩が治ってからまた弓道やらなかつたこと。あいつは本気で弓道をやってた、俺が何時も褒められるなかあいつはずっとこっちを劣等感を感じたような目で見てきていた。俺の勘違いかもしれないが、たぶん悔しかったんだろう。最後まで俺より上にいけなかつたことが）

何処までも彼はお人好しである。例え今のような事があるろうと。全ての物事を自身に重ねて、自身に原因があるのだらうと思ひ、相手に怒りを抱かない。彼はそんな人間だ。

そんな彼だが、彼はまだ知らない。自身が数時間後に大いなる戦い

に巻き込まれることを。一度殺されてしまうことを

「ふう……こんなもんかな。」

俺は自分で磨いた道場の床を見てそう呟いた。間桐慎二という友人……向こうはそうはおもってないのだろうが……彼に頼まれてこの弓道の道場の雑巾がけをこのくらい時間まで行っていたのだ。そして、今満足のいく仕上りになったため、先程のように呟いたのだ。「だいぶ暗くなったな……じゃあ、帰るか。」

そう言つて俺は、鞆をもつて帰ろうかとしていると、とあるものを感じた。

「魔力……!?!」

俺は思わずそう呟いた。何故この付近で魔力を感じたのだろうか……取り敢えず今は様子を見に行くことにした。

『ガキンツ!!』

かなり大きな、ここまで響く程の金属の打ちつけられる音がした。どうやらグラウンドの方から響いてきたようだ。

恐る恐るグラウンドの方へと音を立てないように近づくと、”それを目にした。”

二人の男達が、互いの得物をぶつけ合つて超スピードで戦っている。いや、俺の目から早く見えているだけで彼らからすればなんてことの無い速さなのだろうが。

一人は槍を持った青い装束を纏った男、もう一人は二刀の剣を持った赤い印象のある男。どちらも依然として戦いの速度を緩めない。むしろどんどん加速している。

見続けていると、急に動きを止めた。どうやら何かを話しているようだ。暫く話すと、青い男が槍を構え直した。

その瞬間、かなり高密度の魔力が男の持つ槍に込められた。その男の眼と同じ紅色の朱槍は、今にも赤い男を穿たんと魔力を放つていった。

その高密度の魔力に思わず俺は恐れおののいてしまい、後退りしてしまった。同時に、直ぐに後者の方へと駆け抜けた。

走る。  
走る。  
走る。  
走る。

唯ひたすらにあの男から逃げ延びる為に俺は走り続けた。やつの眼は間違いなく躊躇なく人を殺せる眼だった。恐らく先程の後退りした時の足音で気付かれている。だから俺は生きる為に今走っている。

校舎の三階の廊下に辿り着き、一息ついた。だが、それが命取りだったのだ。

グサツ

「……かはっ」

口から血が……飛び出た……胸には、ささ、れたかん、かく……が……

次第に俺の意識は閉じていく……意識が消え去る前に声が聞こえた。

「すまねえな坊主。これも仕事でな。恨むんなら、あの場所にいた自分を恨むんだな。」

恐らく青い、俺を殺しにきていた男だろう、否、俺を殺した男。そう考えている内にとうとう俺は意識を失った。

……  
……

「やっぱりお前は正義の味方になんてなれない。資格なんてもとりない。分かっていた事だろ。」

「正義を謳うための力も無いくせに憧れて、馬鹿みたいだぜ、お前。」  
……  
……  
せえ

「力がねえから殺されちまったんだよ。てめえの責任だ。正義の味方になるために力をつけなかつたお前のな。」

……  
う……  
せえ

「全くとんでもねえ馬鹿だな。そもそもあんなやつ頼みなんて断つちまえば良かったんだよ。だったらこんなところで」

今度こそ俺ははつきりと謎の声にこう言い放った

”うるせえ!!”

「……………」

確かに、俺にはもとより資格なんてないのかもしれない。ただ引き継いだ夢を呪い(に)叶える縛られている為だけに生きてきたただけだ。憧れた叔父のため。

だが、それが例え偽善に満ちた仮物の正義であろうと、俺は、決して、その「正義の味方」を諦めることはしない。

”だからよ、黙って俺に着いて来やがれ”

それをしきりに声は消えた。思考もクリアだ。死に体の筈の体も何故か動く。血は出ている。そんなことは関係ない。自身の正義のためにあの青い男を”殺す”のだ。まだ目の前にいる。これを、逃すものかッ……………!

俺は本能的に男を殺すべく何かを起動させ、すぐさま言葉を紡ぎ出した。

「投影、開始」ッ!

俺の知らない言葉をいつの間にか呟いていた。その瞬間頭にズキンッ!とした痛みが襲う。同時に知らない筈の刀剣類の記憶が流れ込んくる。俺はその中で最も相応しい武器を言葉のままに、己が手に顕現させた。

”それ”は白と黒、?となっている陰陽剣。名を【干渉】、【莫耶】という。目の前の男が魔力に気付いてこちらを振り向くがもう遅い。俺は既に奴の腹に二刀で斬りつけ、心臓を穿っていた。

「ガハアッ!!」

青い男が憤怒の形相でこちらを見てきた。

「ガフツ……………て、めえ、何もんだ……………それに、その、剣は……………」

奴の獣のような鋭い眼光を放っていた眼は、既に光を失いかけていた。立っているのも不思議なくらいだ。どうにか自身のもつ朱槍で立っているようだ。

「……取り敢えず、今回は俺が阿呆だった。死んだって確信しちまったからな。負けてことにしといてやるよ。だがな、次会った時は……」

その瞬間奴の眼に光が戻り、紅い眼が鋭く怒りの感情をこめて言い放った

「……間違いなくその心臓を穿つ。いや、てめえの命貰い受ける。」

そう言葉をもらしたのち、すぐ消えていった。

それが限界だったのか、俺の体は激しい痛みにも襲われた。

「……アツ……グツ……ガアアアアア!!!」

痛い。痛いなんて言葉では言い表せないほど体が悲鳴をあげている。まるで内側から鋭いものが飛び出ているような痛みだ。肩を骨折した時よりも数千倍も痛いだろう。

体の痛みが訪れると同時に、脳も尋常じやない程の痛みにも襲われる。まるで割れるかのような痛みだ。

息が苦しくなる。正常に呼吸が出来ない。肺へと酸素が送れない。だんだんと体中の血液もそれに伴って冷たくなっていく。

視界はどうに白くなり、何も見えない。何故だか知らないが、視界が見えなくなった時点で体は廊下に倒れていた。

そこで俺は今度こそ、【俺】という自分の生命を失った。



## 第二話 再来の猛犬

衛宮士郎という青年は先程の青い男、ランサーというが、そのランサーとの戦いにおいて既に死に体だった彼は未知の自身ですら分からない魔術行使を行ったことにより、様々な尋常ではない痛みをくらい、とうとう意識を失った――

一件死んだ、いや死んでしまっていた衛宮士郎とはある少女の手によつて命を救われた。彼は目覚めた後、自身の屋敷へと帰るのだった

「……………ッ」

意識が浮上してきた。どういうことだろうか。俺は確かあの青い男と戦ったことで完全に命を失い、死んでしまっていたはずなのだが、何故だか生きている。

体中、神経から脳まで響いていた痛みが消えている。胸も刺されていたはずなのに塞がっている。どういうことだろうか？

取り敢えず、一度自分の家に戻ることにした。

一応家にいたらそれなりには安全だ。この屋敷には、俺の義父である切嗣が魔術結界を張り巡らせている。これならば、仮にもう一度あの青い男が来ても恐らく気付くことが出来る。

恐らくあの男はもうすぐここにやってくる。それまでに最低限の武器を――

『カラン――』

音がしたと同時に俺は気配を背後に感じ、直ぐに前に転がって回避した。

「ちっ、気付いてやがったか。まあいい。今度は小細工は効かねえぞ。」

青い男だった。恐らく真紅の槍を以て俺を穿たんとしていたのだろう、危うく二の舞になる所だった。

予想外に早く奴が来たため、武器が何も無い。どうすれば――

近くにあるポスターを見つけ、手に取った。

「強化、開始」ッ！」

ポスターを解析すると、材質、強度ともに向上している。出来た。今まで殆ど成功しなかった強化魔術が。

「んじやまあ、いかせてもらう、ぜっ！」

真紅の槍をこちらに振るってくる、俺はすかさず強化したポスターで防いだ。

『カンッ！』

「……… ほう、例のやつは使わねえのか。おもしれえ、その小細工でどれだけ持つか試してやるよ。」

このまま受け続けたら恐らくポスターの方が崩壊してしまう。となると逃げるしかない。

「……… ハアッ!!」

振るわれる槍を避け、庭の方へと出ようとする。だが、その動きを読んでいたのか即座に庭に回り込まれる。

「フンッ！」

「ガアッ………!!」

庭に出た瞬間に蹴り飛ばされた。肺の中の酸素が一気に抜けた。同時に口の中に鉄の味が広がる。

土蔵の中に飛ばされ、体制を崩した。

すぐさま畳み掛けるように男が槍を突き刺してきた。俺は咄嗟にポスターを広げて盾のようにしたが、気休めだった。

「しめえだ小僧。油断しなかったらこんなもんだ。なんで生きてんのかは知らねえが、ここで死んでもらう。」

奴が槍を構えた。俺を殺そうとしている。

ふざけるな

ふざけるな!

まだ俺は何も成していないのに、何故こんな所で殺されなくてはならない!

「俺は……… こんな所で死ぬ訳には行かねえんだよ! てめえみてえな……… 平気で人を殺すようなやつに!」

瞬間、俺の中の何かが呼応した。

「七人目のサーヴァントだど!?!」

『ガキンツ!!』

俺を殺さんとしていた槍は、真横から出てきた謎の何かによって弾かれた。

「チィィ……」

青い男がそう呟いたが、全く関心を抱かなかった。なぜなら、目の前に謎の少女がいたからだ。鎧を纏った騎士のような少女だった。

「サーヴァントセイバー、召喚に応じ参上した。」

そして、少女は問いかけてきた。

「問おう、あなたが私のマスターか」

自身のブラチナブロンドの髪を月光で輝かせながら、そう問いかけてきた。

「え……ま、マスター?なんだそれは」

「ここに契約は完了した。これより貴方の剣となろう。マスター指示を」

急な展開すぎてよく分からないが、取り敢えず俺の味方だと言うのはわかった。

「あの青い男を頼む」

「了解しました、マスター」

そう領くと、少女は一瞬で距離をつめ、青い男に手に持つ”何か”で攻撃を行った。

「セアア!ダア!」

「くっ、ふっ!」

『カンツ!カキンツ!』

青い男は苦い表情をしながらその見えない”なにか”を防いでいる。先程の少女は青い男を圧倒するかのよう”なにか”で斬りつけていた。

そして、罅が明かないと思ったのか、男は一度大きく後ろへ下がった。

「自らの武器を隠すとは何事か!貴様、それでも騎士なのか!」

「済まないがこれを見せる訳にはいかない。恥ずべき行為かもしれないが、仕方の無いことだ。」

極めて冷静に少女がそう淡々と言葉を発した。それに対して青い男は顔に憤怒の形相を浮かべ、槍をとてつもないスピードで少女に突き出した。

「セアア！」

「フンツ！」

少女が大きく弾いた。隙が生まれたかに思えたが、もう一度男が後ろに下がった。

「聞かせろ、貴様のその手に持っているものは剣か」

「どうかな、斧、弓、はたまた槍かも知れぬぞ。」

「戯言を……… 剣<sup>セイバー</sup>使い！」

その言葉を仕切りに男は槍を凄まじい速度で少女へ振るいはじめた。

「ハアツ！セイツ！ダアア！」

「ふつ、くつ………」

少し少女が押されはじめてしまった。技量ではなく力量で勝負を仕掛けられたようだ。これは、状況的に少女のほうが不利だろう。

だが、押されはじめてから、少女は初めて反撃を行った。

「はあああ！」

弾いた後、足を使い男を槍ごと蹴り飛ばした。

「ぐっー！」

男は槍とともに後ろへ蹴り飛ばされた。だが、あまりダメージは受けていない。

「ちっ、拉致があかねえな。そろそろ片をつけさせてもらう。」

すると男は、あのグラウンドでやろうとしていたことと同じことを始めた。自身の槍を構え直し、高密度の魔力によってもとより紅い槍をさらに真紅に染め上げていく。

「宝具か……！」

あれはまずい、そう俺の感が言っている。受ければ大変なことになるだろうと俺の感が囁いている。

「それは不味い！避ける！」

だが、そんな俺の声は意味がなく、男は躊躇なくそれを放った。

「もう遅せえよ！【刺し穿つ死棘の槍】 ツツ！」

男の槍が紅き雷撃のようになり、少女へ向かっていく。当然少女はそれを防いだ。しかし次の瞬間、

「ツ!？」

少女の心臓目掛けて突き穿たんとしていた。だが、少女はその槍を予知していたのか、槍の軌道をそらし、防ぎきり、心臓を穿たれることは無かった。肩のあたりを負傷しただけに済んだ。

「躲したな……セイバー……！我が必殺の一撃を……！」

血走った目をしながら少女へそういった。

「今の一撃……因果逆転の呪いか！となると貴方はアイルランドの御子か！」

その言葉で核心をつかれたのか、男は殺気をといた。

「ちっ、バレちまったか。まあ、それもそうだな。宝具撃ちまったら真名なんてすぐ分かっちゃうよな。俺なんて一番分かりやすいからな。」

さも残念と言うふうに男は言った。

「全く、これを撃つからには必殺じゃなきゃなんねえんだがな……まあいい……なに？戻ってこい？はあ……わあつたよ。すぐ戻る。」

すると男は立ち去ろうとする。

「マスターからの命令だ。俺はここで去らせてもらう。」

「逃げるのか、ランサー。」

どうやら何らかの事情で男はここは撤退する様だ。

「ああ、残念ながらな。あと、追ってきてもいいが……」

殺気を全力で放出し、鋭い眼をして言った。

「その時は、決死の覚悟をもってこい……！」

それを仕切りに男は屋根を伝ってこの屋敷を去っていった。

「マスター、お怪我はありませんか。」

「あ、ああ、特に怪我はないけど……あんたは一体……」

「その事は後で説明を……マスター、どうやら来客がきたようです。もてなしてきますので、待っていてください。」

「もてなす……？てっ、おい待てよ！」

少女は何か気配を感じたのか直ぐに屋敷の入口の方へ走り抜けて行った。

「だから……待ってくれよ！」

俺が入口に辿り着くと、そこで少女は誰かと対峙しているようだった。

「マスター、下がっててください。サーヴァントを連れ戻したマスターがここへやって来ました。」

そう言われ入口を出た通りを見ると、少女の視線の先に人が二人いた。

「凜、下がっている。恐らくあのサーヴァントはセイバーだろう。戦闘能力は三騎士の中でもトップクラスだ。」

「ええ、分かっているわ……」

そこにはグラウンドで青い男と戦闘を繰り返していた赤い男と、赤いコートを着た少女がいた。しかし、その少女には見覚えがあり……

「と、遠坂!？」

「なっ、え、衛宮くん!？」

その少女は俺の通う高校でマドンナと呼ばれる程有名な少女、遠坂凜だった。